

## I 糖業の概況

### 1 海外の動向

#### (1) 砂糖類概況

世界の砂糖需給見通しによると、08/09年度の全世界の生産量は1億5,368万トンと、07/08年度の1億6,991万トンより1,623万トン減少すると予想されている。南米、アフリカが増加し、オセアニアがほぼ前年度並みであった一方、EUが生産量を削減したのをはじめ、北・中央アメリカ諸国が減少し、アジアについても、インド及び中国での減少が著しかったことから、大幅な減少となる見込みである。

消費量については、08/09年度は1億6,319万トンとなり、07/08年度の1億5,940万トンより379万トン増加が見込まれている。世界の砂糖消費量の直近10年間の平均増加率は、およそ2.6%であったが、2008年の世界的な経済危機の影響もあり、08/09年度は鈍化するとみられる。先進国の消費は、飽和状態にあるため停滞しているが、途上国は、経済危機の中、依然として高い経済成長率を誇るインドと中国が牽引役となり、消費量を増加させている。

このため、期末在庫については、08/09年度末は4,237万トンと、07/08年度末の5,254万トンから1,017万トン減少する見込みである。

※1. データは平成21年8月現在、農畜産業振興機構委託調査会社 LMC International Ltd. の推計による。

※2. 年度は収穫年度であり、10月～9月である。

#### (2) 砂糖の国際価格の推移

2008年4月～2009年3月のニューヨーク現物相場の月平均価格を見ると、供給過剰と低調な需要となるとの観測から、4月が13セント台、5月は12セント台と、前年度からの下落傾向が継続した。しかし、6月は主要生産国であるインドの減産見込みなどの観測から、投機筋の買いにより一転して上昇に転じ、8月は15セント台に達した。しかし、9月は世界的な金融危機を背景に投機筋が売りに転じ、14セント台に下落し、10月から12月までは12セント台、1月は買いに転じて3月までは13セント台で推移した。

### 2 国内の動向

#### (1) 砂糖類概況

平成19年産の甘味資源作物の国内生産は、てん菜については、作付面積が前年産に比べ減少したものの、融雪の遅れによる定植作業の遅れを、その後の好天により順調な生育を促したことから、前年産より単収が上がり、総収量は429万7千トン、産糖量も70万9千トンと、いずれも前年産を上回った。

一方、さとうきびは、収穫面積は前年産並みとなったものの、台風による被害がみられた一部地域を除き、総じて天候に恵まれ生育がおおむね順調に推移したことから、総収量が149万9千トン、分みつ糖分の収量が142万9千トン、産糖量が17万7千トン（分みつ糖分）と、それぞれ前年産を上回った。

砂糖の消費は、平成16砂糖年度においては222万9千トンと前年度を0.4%

下回り、平成 17 砂糖年度も同 1.9%減の 216 万 5 千トンと減少傾向が続いていたが、平成 18 砂糖年度は同 0.7%増の 218 万 1 千トンと増加に転じ、平成 19 砂糖年度も同 0.7%増の 219 万 7 千トンとなった。

加糖調製品の輸入状況（20 年 4 月～21 年 3 月）は、「ココア調製品」が前年度比 0.2%、「コーヒー調製品」が同 95.8%、「調製した豆」が同 11.5%、それぞれ減少した。一方、「ソルビトール調製品」が前年度比 7.5%、「その他の調製品（ソルビトール調製品を含まない）」が同 0.2%、「粉乳調製品」が同 14.2%、それぞれ増加した。この結果、これらの品目全体では、前年度比 2.1%増加の 43 万 1 千トンとなった。

異性化糖の移出数量（標準異性化糖換算・20 年 4 月～21 年 3 月）の動向は、第 1・四半期では、4 月から 6 月すべてで前年同月を上回り、前年同期比 2.7%の増加となった。第 2・四半期は、引き続き増加傾向となり 7 月が前年同月比 7.2%、8 月が同 11.3%と前年を上回ったが、一転 9 月に同 14.3%の減少と大幅に下回り、前年同期比 2.7%増加にとどまった。第 3・四半期は、11 月が前年同月を上回ったが、10 月、12 月が前年を下回り前年同期比 3.3%減少となった。第 4・四半期は、1 月が前年を下回り、2 月がほぼ横ばい、3 月が前年を上回り、前年同期比 0.3%増加となった。

この結果、20 年度の移出数量は前年度比 0.9%増加の 81 万 9 千トンとなった。

## （2）砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場（東京）上白大袋の価格（20 年 4 月～21 年 3 月）は、製糖会社が、原油の高騰による工場の燃料費や運送費、包装資材費等の上昇により、4 月に特約店に対して建値（出荷価格）を 4%（1 キログラム当たり 6 円）引き上げたことに伴い、1 キログラム当たり 160～161 円となり、10 月までこの水準で推移した。11 月に入ると、製糖会社が、20 年度上期のニューヨークの粗糖現物価格の値上がりを理由に建値を同 6 円引き上げたことから、同 166～167 円となり、2 月までこの水準で推移した。3 月に入ると低迷している需要の喚起を狙い建値を同 3 円引き下げたことから、同 163～164 円となった。

異性化糖の大口需要家向け価格（果糖分 55%、東京・タンクローリーもの、20 年 4 月～21 年 3 月）は、異性化糖メーカーが、原料とうもろこしの国際相場高騰によるコスト高を理由に、平成 20 年 5 月 2 日に日経相場を 1 キログラム当たり 5 円引き上げたことから、1 キログラム当たり 121 円～125 円となり、7 月までこの水準で推移した。8 月に入ると原料とうもろこしの国際相場高騰によったコスト高と猛暑による需給の引き締めから日経相場が同 5 円引き上げ、同 126 円～130 円となり、9 月までこの水準を推移した。その後、異性化糖メーカーが、高騰時に調達した原料とうもろこしによるコスト高を製品価格に転嫁するため、10 月 31 日付けで日経相場を同 5 円引き上げ、同 131 円～135 円となり、1 月までこの水準を推移した。2 月下旬に、原料とうもろこしの国際価格が前年 6 月の最高値から半値程度に落ち込んだことや、海上運賃の低下、円高・ドル安などを背景に日経相場が同 5 円引き下げ、同 126～130 円となった。

### 3 国内産糖の生産動向

#### (1) てん菜糖

##### ① てん菜の生産

平成20年産てん菜の作付面積は前年産比596ha減の6万5,970ha、栽培農家戸数は前年産比286戸減の9,130戸、一戸当たりの作付面積は前年産比0.16ha増の7.23haとなった。

北海道平均の1ha当たりの収量は64.4トン（前年産64.6トン）、総収量も424万8000トン（前年産429万7,000トン）と前年並みの収穫となった。また、根中糖分は17.4%（前年産16.7%）と前年を上回った糖分となった。

##### ② てん菜の生育概況

てん菜の植付け開始は、平年よりやや早かった。

生育初期においては、早期の定植により移植後の活着も良好で、5月中下旬の低温による影響も6月の好天で解消され、生育は良好に推移した。しかしながら、6月上旬には網走地方で大規模な雹害が発生し、生育に大きなダメージを与えた。その後、7月下旬から夜温は低く推移し、特に8月下旬は最高気温も平年を4℃以上下回り生育への影響が懸念されたが、9月の生育状況は各地域ともにほぼ平年並みとなった。

病害虫については、褐斑病の発病が急速に拡大し、病害虫防除所の8月上旬における巡回調査では、十勝、網走、胆振支庁で発生が多く、褐斑病被害が危惧された。しかしながら、9月上中旬は気温が高めながら降水量が少なかったため、9月以降の発病の伸展は鈍く、平年並みの発生にとどまった。その他の病害虫については、根腐病、そう根病ともに少なく、ヨトウガの発生も平年並みであった。

##### ③ てん菜糖の生産

20年産の産糖量は、産糖歩留が17.06%（前年産16.50%）と増加し、1ha当たりの収量が前年と比べ高収量となったため72万4,932トン（前年産70万9,198トン）となった。このうち、てん菜原料糖は27万4,232トン（前年産25万4,898トン）で総産糖量に対する割合は37.8%（前年産35.9%）となった。

#### (2) 甘しや糖～鹿児島県産～

##### ① さとうきびの生産

20年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より384ha（4.1%）増加し9,762haとなった。

作型別割合では、株出60.5%（前年産59.5%）、春植え22.2%（同20.2%）、夏植え17.4%（同20.4%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より391kg（5.6%）増加し7,323kgとなった。地域別では、徳之島が965kg（15.6%）増加し7,166kg、与論島が272kg（4.3%）増加し6,578kg、沖永良部島が91kg（1.2%）増加し7,609kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より6万4,814トン（10.0%）増加し、71万4,881トンとなった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より293戸（3.1%）減少し9,257戸となった。

##### ② さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

気温、日照時間は平年並みか、やや平年を上回ったが、4月の降水量が平年を下回ったため、生育はやや遅れた。

○生育旺盛期（6月～9月）

種子島では、7月は高温、多照に加え適度な降雨があったこと、台風の影響もなかったことから、生育は順調に推移した。

大島地域では、6、7月の降雨量が平年を下回ったため、生育の遅れが危惧されていたが、9月にまとまった降雨があり、茎数、茎長が平年を上回り順調な生育となった。

○生育後期（10月～収穫期）

気温は、平年に比べ10月が高め、11月はやや低めで推移した。また、夏場には定期的な降雨があったことから、順調な生育となった。

③ 甘しや糖の生産

分みつ糖の歩留は、前年実績より0.2ポイント下回り12.38%、含みつ糖の歩留は、前年実績より0.1ポイント上回り11.95%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より6,841トン（8.5%）増加し8万7,624トン、含みつ糖は、前年実績より105トン（11.5%）減少し809トンとなった。

（3） 甘しや糖～沖縄県産～

① さとうきびの生産

20年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より235ha（2.0%）減少し1万2,406haとなった。地域別では、沖縄地域が55ha（0.8%）減少、宮古地域が119ha（2.9%）減少、八重山地域では80ha（5.0%）減少した。

作型別割合では、夏植46.4%（前年産48.3%）、春植12.0%（同11.9%）、株出41.6%（同39.7%）となった。

10a当たりの収量は、前年実績より404kg（6.0%）増加し7,109kgとなった。地域別では、沖縄地域が1,080kg（18.5%）増加し6,926kg、宮古地域が314kg（3.9%）減少し7,834kg、八重山地域も748kg（11.0%）減少し6,063kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は、前年より3万3,134トン（3.9%）増加し88万1,936トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より64戸（0.4%）減少し1万7,411戸となった。

② さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

各地域の月平均気温はおおむね平年並みとなった。

降水量は、3月は本島地域、宮古地域、石垣島では平年を上回る降水量となったが、4月は本島地域、久米島、大東地域において平年より少なく、5月は全地域において平年を下回って推移した。本島地域では、茎長、茎径、茎数とも平年並みか、平年をやや下回るものだった。

○生育旺盛期（6月～9月）

降水量は、6～8月は宮古地域、石垣島を除き、各地ともに平年より少なかったが、9月は大東地域を除きおおむね平年よりも多かった。また、石垣島、与那国島では、9月の台風13号、15号の影響により、降水量が平年比293%、517%となった。台風の影響による葉片裂傷のため、八重山地域では茎長が少なかった。本島地

域では9月以降、適度な降雨量と十分な日照、台風の影響もほとんどみられなかったため、枯死茎が少なく、茎数は平年より多く、茎径は平年並みとなった。

○生育後期（10月～収穫期）

各地域の平均気温は、平年より高い状態が続いた。1月を除き3月までは平年値との差が0.5～3.1度高い暖冬であった。

降水量は10月、12月、1月及び2月において、各地域とも高気圧に覆われ、おおむね晴れの日が続いたため、平年より少ない状態が続いた。11月や3月は、気圧の谷や寒気の影響などから、曇や雨の日が多く平年並みとなった。

③ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留は、前年実績より0.78ポイント上回り12.97%、含みつ糖の歩留は前年実績より1.68ポイント上回り15.12%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より1万1,635トン（12.1%）増加し10万7,529トン、含みつ糖は前年実績より299トン（3.6%）減少して8,036トンとなった。